**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４９回　（２０１８年１１月２０日）**

**・第４９回の勉強範囲：「第二章　信者たちとともに」**

**・📖『福音』２５頁上段L１３～下段L１**

*一八八二年四月九日　日曜日*

*シュリー・ラーマクリシュナは、カルカッタのプラーノクリシュナ・ムケルジーの家の客間に、信者とともにすわっておられた。午後一時と二時のあいだだった。ヴィッシュワナータ大佐（信者、カルカッタ駐在ネパール政府代表）がこの近くに住んでいるので、師は、リリィ・コテージにケシャブを訪ねる前に彼のところに寄ろうと考えておられた。おおぜいのプラーノクリシュナの隣人や友人たちが、シュリー・ラーマクリシュナにお目にかかるよう招かれていた。みなが、彼の言葉をきこうと待ちかまえていた。*

（解説）

プラーノクリシュナ・ムケルジー（プラーノクリシュナ・ムコバッダヤ）のカーストはブラーミンでした。ブラーミンは英語読みです。正確なサンスクリット語は「ブラーフマナ」（bráhmana：聖典を教えるカースト。祭司。字義は「ブラフマンを知っている人、悟った人」）。略して「バムン」と言いますが、タクールはプラーノクリシュナを「モタ・バムン」（太ったブラーミン）と呼んでいました。タクールはよく信者にニックネームをつけて呼んでいましたね。

プラーノクリシュナはシュリー・ラーマクリシュナのお世話をよくし、タクールを家に招待することもありました。ある信者が「プラーノクリシュナはあなたのお世話をよくしますね」と言うと、タクールは「彼はそうしなければならない。なぜなら私は彼に賄賂を渡しましたから」と答えました。

自分の願いを叶える目的で、国の役人に金品を贈ったり高級レストランで接待するといった賄賂はどこの国でもありますが（笑い）、タクールはその「賄賂」という言葉を使いました。タクールが賄賂をあげた？？──これはどういうことでしょうか？

プラーノクリシュナには息子がいませんでした。そこでシュリー・ラーマクリシュナにそれを願いました。するとシュリー・ラーマクリシュナの恩寵で子供を授かりました。それをとても喜んでプラーノクリシュナはシュリー・ラーマクリシュナのお世話をするようになりました。だからシュリー・ラーマクリシュナは賄賂という言葉を使ったのです。（笑い）

話の前後関係を知るととてもおもしろい。このような世俗的な願いも、シュリー・ラーマクリシュナは満たすことができました。タクールが満たすのは霊的な願いですが、このように世俗的な願いを満たした例もあります。

**・📖『福音』２５頁下段L２～L１２**

*師「神との栄光。この宇宙は、の栄光である。人びとは、の栄光を見て何もかもを忘れてしまう。彼らは神（そのもの）を求めない。この世界は彼の栄光であるのに。みなが『女と金』を楽しもうとする。しかし、その中にはあまりに多くの不幸と心配がある。この世界はヴィシャーラークシー（シュリー・ラーマクリシュナの故郷のちかくを流れる河）の渦巻のようなものだ。舟がひとたびそこに入ったら、もう助かる望みはない。また、この世界はイバラの茂みのようなものだ。一つの棘の群れをやっと切りぬけたと思ったら、もうすでに次の群れに巻き込まれている。いったん迷路に入ったらぬけ出すことは非常にむずかしい。世間に暮らしていると、人はいわばしなびてしまうのだ」*

（解説）

王様に富があるように、神様にも「富」（wealth）があります。それはこの宇宙です。宇宙は神の富です。そして人は、それをみて感動します。興味を持って好きになります。楽しみや喜びを得ます。たとえば富士山や琵琶湖の美しい景色に感動し、金銀の宝石類に驚きます。

しかし「富」よりも「富の持ち主」のほうが偉大ではありませんか？　シュリー・ラーマクリシュナは「皆は神の富を見て感動しているが、その富が誰の富かを考える人はいない」と言っています。

王様の富を見て、ふつうの人はその富に驚いておしまいです。しかし賢い人は富よりも富の持ち主（王様）に会ってあいさつしたいと考えます。アインシュタインの素晴らしい発見に感動するだけでなく、それは誰の頭から生まれたアイディアだろう？と思ってアインシュタイン自身と話したいと考える人もいるでしょう？　本当に賢い人は素晴らしいものに感動するだけでなく、その持ち主を探し、実際に会って話したいと思います。シュリー・ラーマクリシュナも同じです。この宇宙の源（持ち主）そのものを楽しみたい。

一方我々は、この宇宙のものを見て、たとえば富士山を見て琵琶湖を見て、とても感動してうれしくて「素晴らしい、素晴らしい」と言いますが、「これは誰が創ったのだろう？」「富士山の源は何だろう？」とまで考える人はいません。なぜなら我々は幻惑された状態（deluded）だからです。この宇宙の「女と金」（カーミニ・カンチャナ　👉『ラーマクリシュナの福音』の注釈参照）に幻惑されていると、苦しみ、悲しみ、ストレス、不安がベースとなって、「女と金」に一回入ると出てこられない「迷路」でさ迷う状態となります。そして困っています。

**・📖『福音』p25頁下段L13～L23**

*ある信者「それでは、どうしたらよいのでしょうか」*

*師「祈りと、そして高徳の人との交わりだ。医者の助けがなければ病気を治すことはできないだろう。しかし、たった一日ぐらい宗教的な人びととともに暮らしても十分ではない。たえずそれを求めなければならない。病気が慢性になっているのだから。また医者と一緒に暮らさないと脈を正しく見ることはおぼえられない。しじゅう彼らについて歩いていると、粘液質の脈と胆汁質の脈とが見分けられるようになるのだ」*

*信者「高徳の人と交わるとどういう善いことがございますか」*

*師「神への渇仰心が生まれる。神への愛が生まれる。霊性の生活では、渇仰心がなければ何一つ得られるものではない。*

（解説）

困った状態から抜け出すにはどうしたらよいのかという信者の問いにたいするシュリー・ラーマクリシュナの答えは２つ──（１）サードゥ・サンガと（２）祈りです。

**（１）サードゥ・サンガ（sádhu-sanga：高徳な人との交わり、神聖な交わり）**

**絶えないサードゥ・サンガが必要**

タクールは「1度のサードゥ・サンガでは結果は出ない。たえずそうしなければならない」とおっしゃっています。なぜなら我々の病気は「たいへんな病気」で、「いろいろな病気（＝貪欲、幻惑、怒り、色欲、うぬぼれ、ねたみ）」だからです。重病は長期間定期的に薬を飲まなければ治らないように、我々も、何度もサードゥのところに出かけて（constantly）神聖な交わりを持つ必要があります。

**サードゥ・サンガで得られる結果**

ではサードゥ・サンガで得られる結果は何でしょうか？

ひとつの大きな結果は「神を好きになること」で、これは信者としての、重要な要素です。

ところで「神を信じること」と「神を好きになること」は同じではありません。それはお正月に神社に初もうでに行く人たち（＝神を信じる人たち）すべてが神を好きというわけではない、ということからも明白です。このように、「神を信じること」と「神を好きになること」には大きな違いがあり、神を好きにならない限り、本当の信者とは言えません。

また「好き」には段階があります。英語には「like」と「love」という単語があり、「好き」の段階がはっきりしていますが（ベンガル語も同様です）、日本語では「愛する」（love）という言葉は直接的過ぎるとして避けることが多く、loveも「好き」と言います。しかし「好き」という言葉を使っていても、状況によって「愛する」を意味する場合もあり、日本語にも「好き」には段階があります。

信者の中でもふつうの信者の段階は「神様を好き」というレベルです。しかし我々はさらに段階を上がって、「神様を愛している」レベルにまで進化しなければなりません。またそうでなければ、我々の世俗の病気は治りません。しかし、神を愛することは難しい。なぜなら神は目に見えないからです。

人は目に見えるもの（粗大なもの）を愛するのは容易です。人の心の状態は粗大であり、そのような心はいつも粗大なものについて考えているし、粗大な心が感覚器官を通してコンタクト（接触）する対象も粗大なものだからです。しかし、神は精妙です。神に形はなく、神の写真があったとしても実際に生きているわけではありません。コンタクトもできない、会ったこともない、写真や像だけの存在を愛することは、簡単なことでしょうか？

我々は、生きているものとは話をするなど、コミュニケーションをとることができます。ですが神からコンタクトがあったとしても、我々にはそれが理解できず、一方的ですから（笑い）、神とのコミュニケーションは難しいのです。ワンサイドのコミュニケーションで、信頼関係を築くことは困難です。そのうえ我々は、祭壇前に座って神の写真を見ているときには神を思い出せても、目を閉じればすぐ他の想像が始まる、といった状態です。このような状態にある信者が、どのようにして神との愛の関係をつくっていったらよいのでしょうか？　これは信者にとって、大きなチャレンジです。

我々の毎日の生活は、ほとんどが「想像」の時間です。たとえば、好きな人と会うよりも好きな人について考える（想像する）時間の方が多いですし、好きではない人についてあれこれ想像する方が、その人と接触する時間より長いです。また実際の仕事が終わっても、仕事についてずっと想像している人もいます（考えたくなくても考えてしまい、困っている人もいます）。

つまり、良い／悪い、ポジティブ／ネガティブに関係なく、実際に会って接触する時間よりも、それについて想像する時間のほうがはるかに長い、ということを言っています。我々が生きている人や実体験している仕事などを想像するのは日常の自然な行為ですが、生きていない、会ったことのない神について想像し考え続けるのは日常にはないことで、難しいことなのです。

しかし会ったことのない人については想像から始めるしかありません。そして想像「愛している」段階にまで進むというのですからそれは本当に難しいことですが、しかし絶えずサードゥと神聖な交わりを持つことで、サードゥから「神を愛する」インスピレーションをもらうことができます。

**「サードゥ」の意味**

サードゥ・サンガの「サードゥ」の意味には２つあります。ひとつには悟った人。もうひとつには、まだ悟ってはいないが実践が進んでいるお坊さんです。悟った人に会うことは現実的には難しいですから、信者にとっては実践が進んでいるお坊さんとの交わりが重要、ということになります。

スワーミージーは「神がいるなら神を見なければならない」とおっしゃいました（☞『ラージャ・ヨーガ』18頁L10）。神をいかに雄弁に語っても、その人が悟っていないのであれば、それは想像上の話です。神は悟らなければ、その存在を知ることはできません。だから我々は「神がいてもいなくても、悟らなければ同じことだ。だからこそ絶対に悟るのだ」という強い目的意識で実践しなければなりませんし、その目的意識で実践して進歩しているお坊さんに会わなくてはなりません。神を言葉だけの神で終わらせてはなりません。

ところで同じ目的意識という意味では、信者とお坊さんは同じポジションです。ではこの二者の、何が違うのでしょうか？

強い目的意識を持ったお坊さんは、まだ悟っていなくても目的へ向かってかなり進んでいます。そのようなお坊さんの人生のフォーカス（焦点）は神だけです。すべての考え・すべての働き・すべての仕事のフォーカスは神です。人生の目的は神です。「すべてのものが神につながって」（everything connected with God）生きています。すなわち「すべてのものは神の意志によって生まれたもの」「すべてのものは神のもの」「すべてのものは神のものであるだけでなく、神である」「すべての状況に神を見る」「すべての人に神を見る」ことを実践しています。

信者はそのようなお坊さん（サードゥ）の実践を見て、霊的実践のインスピレーションを得ます。化学は本で学ぶより、実験したほうが勉強の印象が鮮明になりますが、霊的実践も同じで、聖典に書いてある言葉を学ぶより、実際に体現しているサードゥを見ることで印象が深まります。

これは私の経験からの話ですが、見習い僧としてラーマクリシュナ僧院に入る多くの人の、ヒーローはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダです。もちろん『ラーマクリシュナの福音』を読んでラーマクリシュナのことは好きですが、タクールについてのアイディアはまだ浅く、人生のフォーカスはさほどタクールにはありません。見習い僧の多くは、ラーマクリシュナの僧院は素晴らしい僧院だとか、そこに入れば完璧な人生を送ることができるとか、お世話ができるとか、素晴らしいお坊さんがいるとか、スワーミージーやタクールが好き、というイメージで入ってきます。

つまり、彼らでさえ最初からタクールを愛することは難しく、彼らにとってさえ、タクールをどのように「好き」から「愛する」か、というのは簡単なことではないのです。彼らも毎日毎日実践をして、そして徐々に「愛している」段階へ進化します。サンダルウッドはそこにあるだけではほとんど匂いませんが、ペーストするとかぐわしい匂いを発します。そのように、神への愛も、毎日毎日の実践によって増してゆくのです。

もちろん信者は家族への責任がありますから、彼らほどはできなくても、彼らの実践を自分の生活の範囲内で少しずつ見習って進むことは可能です。

**サードゥやアーシュラムでの実践から学ぶ**

また、アーシュラムを訪問することによっても、サードゥ・サンガと同じ結果を得ることができます。

Mさんは、自分のところへ学びに来る家住者に向かい、たびたび「早朝のベルル・マトに行ってください」と助言をしました。早朝はサードゥたちの瞑想の時間です。瞑想して神に集中しているサードゥを見ると、「自分も瞑想をしよう」などの霊的インスピレーションを受けることができます。だからMさんはサードゥの食事の時間でも仕事の時間でもなく、早朝の訪問を勧めました。

日本ヴェーダーンタ協会（ラーマクリシュナ僧院の日本のアーシュラム）のスケジュールも、すべてシュリー・ラーマクリシュナに焦点をあてています。アーシュラムに来れば、アーシュラムで神中心に生活をしているサードゥの様子を見ることができ、神中心の毎日の過ごし方を知ることができ、神への愛をどのように深めるかを目の当たりにすることができます。サードゥを見て、「彼は長時間瞑想している。私は仕事（義務）があってそこまでできないが、しかし３０分でも瞑想しよう」というインパクトやインスピレーションを受けることもできるでしょう。

日本ヴェーダーンタ協会での主な実践例を挙げます。

・朝夕の瞑想、ジャパ

・ヴェーダの祈り、チャンティング

・朝夕の聖典勉強（輪読）

・神様に供物のお供え（そしてそのおさがりをいただく）

・食前食後のマントラ

・夕方の祈り

・『ラーマクリシュナの福音』を読む

・外出前と帰宅後、祭壇に行ってタクールに挨拶

・車の運転出発の前に神に祈る

・新しいもの（衣類や道具類など）をタクールにお供えしてから使う（それらをタクールのおさがりとして使う）

・生誕祭などイベントの招待状をお供えしてから発送する

・新刊書、献立表、年間スケジュール表などもお供えしてタクールに報告する

・毎日の出来事をタクールに報告する

・（朝夜だけでなく）少しの時間があったら一日何回でも座る

**一日何度も座ることの重要性**

このうち、「少しの時間があったら一日何回でも座る」ことは、実践的で有用です。

（信者の中にはいろいろいてイニシエイションのマントラをもらっても忘れる信者もいますが──そのマントラは宝なのに）ふつう、信者は朝夕の２回座って瞑想をしますが、その他の時間でも、たとえ長く座れなくても5分でもいいですからちょっと座って祈ったほうがよいです。朝夕のどちらかできないときには「では明日にしよう」とは考えず、５分でも１０分でも座ったほうがよいです。そうして少しの時間でも座ると、神とつながった状態が増し、その結果、瞑想も良くなります。

瞑想するときの信者の希望は「瞑想のあいだ、ずっと集中し続けること」ですが、しかしそれは無理な話です。1日２４時間のうち２３時間３０分は全く神について考えていないのに、残りの３０分間だけ神に集中し続けることなど、不可能だからです。瞑想を始めてもやめてしまう人に「集中できないから」という理由を挙げる人がいますが、その原因は、1日のうちのほとんどの時間を集中の対象（神）を忘れて過ごしているからです。ですが短時間でもよいので、何回か座って神を思い出すことで、神とつながった状態が増え、神とつながることがらくになります。

突然神とつながることも、突然瞑想に集中することも難しい。だから協会はスケジュールを組んで、さまざまな実践をしています。信者は協会でそれを学んで、家で実践することができます。

しかし、サードゥ・サンガに行っても、何も実践しなければ、その結果を得ることはできません。「うちはうち。お寺はお寺」とか、「それはマハーラージやサードゥ（出家者）のやり方。我々家住者のやり方ではない」と考えると何も学ぶことはできません。それではレベルはlikingまでで、Lovingはできません。

大事なことは、アーシュラムやサードゥのやり方を見て、観察して、全部でなくてもいいので個人的に何ができるかと考え、それを実践することです。たとえば食前のマントラは家族と一緒には唱えられなくても、一人だったらできるでしょう？　実践すれば、神との関係が深まり、「好き」が「愛」に変わります。それがサードゥ・サンガの結果です。それにはもちろん信仰が必要ですが、少し座る、少しジャパする、神にあいさつするなどの行為に何も特別な力、お金、時間はいりません。だからもっともっと実践してください。するともっともっとタクールのことを思い出します。やがてタクールの恩寵で、タクールを「好き」から「愛している」に変わります。

**すべての中に神様を見る実践**

「すべての中に神様を見る」実践も、最初は「あの人は好き、この人は嫌い」という考えを封じ、「この人の中に神様。あの人の中に神様。それも神様。あれも神様」と想像するだけです。しかし「すべての中に神様がいる」という正しい想像によって、徐々に神とつながっている状態が増え、ある日、絶対に、神のヴィジョンを見ます。そしてサードゥも一生懸命それを実践していますから、それを見て学んでください。サードゥにも冗談を言ったりからかったりするムードのときもありますが、それを学ぶのではありません。

タクールは、すべてのものにマザー・カーリーを見ていました。ちょうどマザー・カーリーにお供えしていたときに猫が来たので、猫にお供えを食べさせました。なぜなら猫の中にマザー・カーリーを見ていたからです。☞（『ラーマクリシュナの生涯　上巻』174頁L4）

ホーリー・マザーは神様にお供えしたものにアリが群がるのをどけることができないとおっしゃいました。ふつうはお供物にアリが来たらどけるでしょう？　しかしホーリー・マザーはアリの中にタクールがいて、タクールがお供えを食べていると見たのでどけることができませんでした。ホーリー・マザーにとってアリはアリではなく、タクールでした。

想像から始めて、心がきれいになると、神の恩寵で本当に神のヴィジョンを見ます。信者はそれを実践しているサードゥからその実践方法を学ぶことができます。

**サードゥや悟った信者の「生涯」や「回顧録」を読む**

また、サードゥや悟った信者のレミニッセンス（回顧録）を読んで生涯の出来事を知ることによっても、神への愛が増えてゆきます。トゥリヤーナンダジー、ブラマーナンダジー、Ｍさん、ギリシュ・バブー、ナーグ・マハーシャヤ、スワーミージーたちはどれくらいタクールを愛したことでしょう！　その記録を読んだら印象的ではありませんか？　それを読んで我々は学ぶことができます。

スワーミージーは、「あなたは講話の時には『ブラフマン、ブラフマン』と言っていますが、個人的に話すときにはいつも『ラーマクリシュナ、ラーマクリシュナ』ですね」と言われていました。トゥリヤーナンダジーもヴェーダーンタ哲学の信奉者であったにもかかわらず、「私の個人的な見方では、非二元論的もラーマクリシュナ、限定された二元論的もラーマクリシュナ、二元論的もラーマクリシュナです」とおっしゃいました。彼らは本当にタクールにフォーカスしていました。他の弟子も、信者もそうです。彼らはみな、中心はシュリー・ラーマクリシュナでした。

**家に祭壇をもうける**

自分の家（自分の部屋）に祭壇をもうけてください。そうすることで、今まで述べたさまざまな実践がらくになります。家に祭壇があれば、神を身近に感じ、神への愛をらくに育くむことができます。

祭壇はインドではとても普通ですが、イスラーム教徒の家には絶対になく、またキリスト教徒もイエスやマリアの写真があっても家に祭壇があるかどうかは疑問です。ですがヒンドゥ教徒と仏教徒にとっては、祭壇（仏壇）をまつり、お線香やお飾りやお供えをするのはとてもふつうです。

祭壇をまつれば、神へのあいさつやお供えが簡単にできるばかりか、「遠い天国におられる神」ではなく「家族の一員のような神」となり、神とともに家に住んでいる気分になります。この家も、何もかもすべては神の持ちものですから（ふつうの人は神様のうちとは言わないで、自分のうちと言うでしょうけれど（笑い））、神は家族であるだけでなく、家長となります。

**想像が実在となるまでチャレンジを続ける**

我々にとって、最初、神は想像的です。神は実在ですが、最初、我々はそれを想像しかできず、想像から始めて、それを実在だと認識するまで進なまないとなりません。それは大きなチャレンジですが、絶えないサードゥ・サンガによって可能になります。そうでなければ「神は最初から最後まで想像」で終わり。アーシュラムに行っても想像のまま。死ぬ前も想像のまま。結局、神は想像の産物で終わりです。

２０年信者でいようと、３０年信者でいようと、実践しなければその人はアーシュラムに来た当初となんら変わりません。あとから来た人が実践をしたら、その人が本当の信者です。私の言うことを聞くだけでなく、自分で考えて下さい。自分で内省してください。内省し、自分で本当にそうだと得心し、そして実践すると、神は想像から実在になります。しかしそのプロセスには実践が必要です。「悟りたい」「神に会いたい」と希望だけ言っていても叶いません。

**・📖『福音』２５頁下段Ｌ２２～２６頁上段L１４**

*師「神への渇仰心が生まれる。神への愛が生まれる。霊性の生活では、渇仰心がなければ何一つ得られるものではない。*

*つねにサードゥたちといっしょに暮していると、魂は神を求めて落ちつかなくなる。このあこがれは、家族に病人を持つ男の心境に似ている。彼の心は、どうしたらこの病気が治るだろうかと考えて、絶えず落ち着かない状態にあるだろう。人は神に対して、職を失い、一つの事務所から他の事務所へと仕事を探し歩いている男の熱望のようなものを感じなければいけない。あるところで空席がないといって断られても、彼は次の日にまたそこに行き、『きょうは空席がありますか』とたずねるだろう。*

*もう一つの方法がある。熱心に神に祈ることだ。神はまさにわれわれの身内でいらっしゃる。われわれは、彼に『おお神よ、あなたはどのようなお方なのですか。御自身を私にお示しください。あなたは私にご自分をみせてくださらなければいけません。そうでなければ、あなたはなぜ私をおつくりになったのですか』と言うべきなのだ。*

**（２）祈り**

もう一つは祈り、それもルーティンではない、あこがれ（yeaning）をもった、中から出る祈りです。中から出ないと神は聞きませんし、結果も出ません。我々の祈りはリップサービスのように（笑い）口から出ています。

タクールはyeaningの例を『福音』の中でたくさん話していますが、ここでは世俗的なことについてのyeaningの例を2つ挙げて「どれくらいのあこがれをもって神を求めるか」を伝えています。

ひとつは、仕事を探す人の例。今はインターネットで検索しますが、昔は事務所にでかけて「仕事はありますか？」と探しました。その人は、「仕事はないよ」と言われても何度でも着て仕事を探します。仕事をしてお金を稼がなければ生きることができないからです。それほど切実だからです。だから「仕事はないからしばらく来るな」と怒られても気にせずまた来て一生けんめい仕事を探します。これはお金をかせぐことについてのyeaningの例。

☞（『福音』26頁上段L6）

もうひとつは、家族が病気になったときのyeaningの例。家族がどうしたら治るか、いつも考えています。　☞（『福音』26頁上段L2）

「スワティ星が昇るときに雨が降り、その雨水が人間のされこうべにたまる。そこにカエルがきて、そのカエルをヘビが追う。ヘビがカエルに噛みつこうとしたときにカエルが逃げ、ヘビの毒がされこうべの中に落ちる。その毒から薬を作りなさい」と聞いたので、神に切実に祈ってそれらのすべての要素をそろえることができた例があります。

☞（『福音』672頁下段L11～673頁上段L14）

そして、あこがれを持って「神様、絶対に姿をあらわしてください」と神に祈るyeaningの例が次の２つです。

お父さんが、留守のあいだに神様にお供えをするように息子に伝えて出かけました。子どもは神様が本当にやってきてお供えを食べると思っていましたが、一向に神様が出てこないので子どもは「神様、食べてください、食べてください」と泣き出しました。（その子はお腹もすきました（笑い））これは子どもの純粋な祈りです。すると神様は笑いながら写真から現れて、お供えをすべて召し上がりました。とてもかわいいではないですか？（笑い）　家族は戻ってきてお供えが何もないのでびっくりした。子どもが食べたと疑ったかもしれない。ふつうの世俗的な人は、そのように疑いませんか？

☞（『福音』306頁上段L15~下段L13）

ある女の子は幼いときに結婚してすぐ未亡人になりました。だから彼女は自分のだんなさんに会ったことがありませんでした。あるとき友達にだんなさんがいるのを見てその子は言いました、「私のだんなさんはどこですか？」。父親が「ゴーヴィンダ（クリシュナの一名）がお前の夫だよ。お前が呼べば、彼は来るよ」と言うと、「ゴーヴィンダ、ゴーヴィンダ、来てください」とたいへん泣いてゴーヴィンダを求めました。そして神はあらわれました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『福音』305頁下段L12～最終L）

これらは物語ですが、本当の話もありますね。タクールの例です。タクールは「マザー・カーリー、もしあなたがあらわれないなら、私は自分の首を切ります」と首にナイフを突き立てました。そしてマザー・カーリーが現れました。　　　☞（『福音』序論(46)L6~L8）

これらはみな、始めは想像的ですが、あこがれをもって祈ると想像を超えることができます。たとえば「神様、あなたが私をつくりました。私はあなたの子供です。なのにどうしてあなたは姿を見せないのですか？」と神を見たいという憧れをもって祈ります。すると神への愛も増えます。ある日神を絶対に見ます。

**（３）サードゥ・サンガで識別力を養う**

もう一つは識別です。サードゥは「何が一時的か。何が永遠で無限か」をいつも識別していますから、サードゥ・サンガによって、信者は識別の仕方を学ぶことができます。もちろん識別は聖典の中にもありますが、実践している人から学ぶことによって印象が深まります。

信者は、サードゥのやり方、人生のフォーカスの仕方、識別の仕方という３つをサードゥ・サンガによって学ぶことができます。

（第４９回『福音』勉強会以上）